

小説『死の棘』に対するコミュニケーション的 アプローチ

——「患者と見なされる人（Identified Patient）」としてのマヤをめぐって——

花 田 里欧子*

序 論

(1) 研究の目的と視座

本稿は、島尾敏雄の小説『死の棘』¹⁾に描かれる人間関係をコミュニケーション論の視座から分析する。具体的には、グレゴリー・ベイトソン、ドン・D・ジャクソン、ポール・ワツラウィックらによって発展させられた語用論的・システム論的アプローチを分析の枠組みとして採用する（Bateson, 1972, 1979; G. Bateson & M. C. Bateson, 1987; Bateson & Donaldson, 1991; Ruesch & Bateson, 1951; Watzlawick, 1964, 1978; Watzlawick, Beavin, & Jackson, 1967; Watzlawick, Weakland, & Mental Research Institute, 1977）。この視座に立つことで、本研究は、登場人物の行動を個々人に内在する病理の表出としてではなく、家族という一つの相互作用システム内で生起し、維持されるコミュニケーションのパターンとして捉え直すことを目的とする。この手続きは、エドワード・オールビーの戯曲『ヴァージニア・ウルフなんかこわくない』に対する分析²⁾（Bavelas, 1967）を先行研究としており、関係の仕方そのものを解明の対象とする。本稿では、コミュニケーション分析を通じ、小説の物語が、実際の人間関係システムを支配する普遍的なルールを解明するための、シミュレーションとして機能しうることを示す。

(2) 中心仮説の提示

本稿が提示する中心的な仮説は、以下の通りである。

もし『死の棘』の物語が続けば、『ヴァージニア・ウルフなんかこわくない』における架

*はなだ りょうこ 東京女子大学教授

空の「息子」の存在とその喪失が夫婦関係を規定していたように、『死の棘』においては、長男で兄の伸一ではなく、長女で妹のマヤがシステムの恒常性を維持するために「患者と見なされる人 (Identified Patient)」(Bateson, 1960a, 1960b) としての役割を担うことになり、結果として何らかの症状を形成し、極めて苦しい状況に置かれるであろう。

この仮説は、硬直した家族システムがその病理的な平衡を維持するために、成員の一人に症状という形で機能不全の代償を負わせるという、家族システム論の基本的な洞察に基づいている。

(3) 結論の予告と論文の構成

結論を先に述べれば、このコミュニケーション分析に基づく仮説は、作者である島尾敏雄とその家族が後に経験した実際の出来事によって、悲劇的かつ驚くほど正確に検証されることになる。すなわち、一家が奄美大島へ移住した後、マヤが知性と意識を保ったまま、原因不明の重篤な不随意運動と声の障害を発症したという事実である(花田, 2018)。この事実は、本稿で展開される理論的分析の妥当性を裏付けるものと言えよう。

本稿は、まず第1章で家族を相互作用システムとして捉えるための理論的枠組みを概説する。続く第2章では、その理論的枠組みを用いて、小説に描かれる夫婦間の病理的なコミュニケーション・パターンを具体的に分析する。第3章では、その分析を踏まえ、システム内における子どもたちの役割、特にマヤが「患者と見なされる人 (Identified Patient)」へと至るプロセスを考察し、中心仮説を構築する。そして結論において、仮説の最終的な定式化を行い、それが実際の出来事によっていかに検証されたかを論じる。

第1章 理論的枠組み

本章では、小説『死の棘』に描かれる登場人物間の相互作用を分析するための理論的基盤を解説する。ここで提示する概念群は、人間の苦悩の原因を個人の心理や過去の経験にのみ求めるのではなく、現在進行形の関係の中に現れるコミュニケーションのパターンに焦点を当てる。この視座の転換は、登場人物たちの行動を新たな光の下で理解するための戦略的要石となる。

1.1 相互作用システムとしての家族

本稿の分析の基礎となる「システム」とは、ホールとファーゲンの定義によれば、「対象間の関係とその対象の属性から成り立っている集合」である。この定義に基づき、家族を一つの有機的な「ホメオスタシス・システム (恒常性維持システム)」(Jackson, 1954, 1957) として捉え

ることができる。このシステムは、内部環境の変化にもかかわらず、全体の安定性を維持しようとする傾向を持つ。そして、その安定性は、成員によって意識されることのない目には見えない「ルール」(Jackson, 1965a)によって統治されている。

この視点に立つとき、ある行動の原因を特定の個人に求める直線的因果律は放棄される。代わりに、システムはフィードバック・ループを持つ円環的な相互作用の連鎖として理解される。この円環の中では、ある人の行動(A)が他の人の反応(B)を引き起こし、その反応(B)がさらに最初の人(A')を規定するというように、原因と結果は分かちがたく結びついている。

1.2 病理的コミュニケーション・パターン

ベイトソンは、関係における進行性の分化パターンを「スキズモジェネシス（分裂生成）」(Bateson, 1935, 1936)と名付け、二つの主要な形式を区別した。

- ・相補的スキズモジェネシス (Complementary Schismogenesis) 支配／服従、誇示／感嘆のように、互いに異なるが相互に補い合う行動によって特徴づけられる。このパターンがエスカレートすると、一方はますます支配的に、他方はますます従属的になるというように、関係の歪みが進行する。
- ・対称的スキズモジェネシス (Symmetrical Schismogenesis) 競争や対立に見られるように、互いに類似した行動の応酬によって特徴づけられる。一方が自慢すれば、もう一方も負けじと自慢し返すといった相互作用がエスカレートし、関係の崩壊につながる危険性をはらむ。

このような相互作用の連鎖において、参加者はそれぞれが異なる仕方です「連続した事象の句読点 (punctuation)」を打っている。例えば、夫は「妻がいつも不機嫌だから私は黙り込む」と状況を分節化し、妻は「夫がいつも黙り込んでいるから私は不機嫌になる」と分節化する。同じ出来事の連鎖でありながら、句読点の打ち方が異なるために、両者は全く異なる「現実」を経験し、終わりのない非難の応酬に陥ることになる (Watzlawick, 1976, 1984, 1988, 1990)。

1.3 論理階型論とダブル・バインド

ベイトソンらが統合失調症のコミュニケーション論的仮説として提唱した「ダブル・バインド」(Bateson, Jackson, Haley, & Weakland, 1956; Perceval & Bateson, 1961)は、本稿の分析において中心的な役割を果たす。この理論は、ラッセルとホワイトヘッドの論理階型論に基づいている。この理論の要点は、「あるクラス（集合）は、それ自身のメンバーではありえない」ということであり、クラスとそのメンバーは異なる論理レベルに属するというものである。ダブル・バインドの核心は、ある論理階型におけるメッセージ（例：言語的な内容）と、より高次の階型に

おけるメッセージ（例：声のトーンや文脈が示す関係の定義）とが、互いに矛盾し、受け手を拘束する点にある。

ダブル・バインド状況は、この異なる論理レベルのメッセージ間で矛盾が生じ、受け手がパラドックス的な状況に追い込まれるときに発生する。その構成要素は以下の通りである。

1. 二者以上の重要な関係：通常、親子関係など、生存にとって重要な関係。
2. 繰り返される経験：一度きりの出来事ではなく、習慣的なコミュニケーション・パターンとなっている。
3. 第一の否定的な命令：「これをせよ、さもなくば罰を与える」または「これをするな、さもなくば罰を与える」という形式の命令。
4. 第二の命令：より抽象的な（メタ・コミュニケーションの）レベルで、第一の命令と矛盾する命令。これも罰によって強制される。
5. 第三の否定的な命令：受け手がこの矛盾した状況から逃れること、あるいはこの矛盾についてコメント（メタ・コミュニケーション）することを禁じる命令。

この状況下では、受け手はいかなる反応をしても罰せられる「ノーウィン No-win（勝ち目のない）」状況に陥る。例えば、「自発的でありなさい」という命令は、それに従えば自発的ではなくなり、従わなければ命令違反となるパラドックスを内包している。このような経験を反復的に強いられると、個人は自己の内的メッセージと他者からのメッセージを正確に識別する能力を徐々に失っていく可能性がある。

1.4 患者と見なされる人 (Identified Patient)

家族システム論において、症状を持つ個人は「Identified Patient (IP)」, すなわち「患者と見なされる人」と呼ばれる。この概念が示唆するのは、IP の症状は、単にその個人の問題ではなく、家族というシステム全体の機能不全の現れだということである。多くの場合、その症状は、家族内の他の葛藤や問題を覆い隠し、システムの病理的なホメオスタシス（均衡）を維持するという重要な役割を担っている。

したがって、IP は単なる受動的なスケープゴートや犠牲者ではない。むしろ IP は、家族の病理的なダンスにおける能動的（ただし無意識の）な参加者であり、その症状はシステムを調整する一つのコミュニケーション行動である。IP は、システム全体の病理を一身に引き受けることで、他の部分の崩壊を防ぐという、システムにおける極めて重要な機能を果たしている。この理論的枠組みは、次章で展開される『死の棘』の具体的なコミュニケーション分析の礎となる。

第2章 小説『死の棘』における夫婦の相互作用のコミュニケーション分析

本章では、前章で提示した理論的枠組み、すなわちホメオスタシス・システム、スキズモジェネシス、句読点の葛藤、そしてダブル・バインドといった概念を用いて、小説『死の棘』に描かれる夫（トシオ）と妻（ミホ）の間のコミュニケーション・パターンを具体的に分析する。この分析を通じて、二人の関係がいかんして硬直した病理的な相互作用システムを形成し、維持しているかを明らかにすることを目的とする。

2.1 「狂気」のホメオスタシス・システム

小説に描かれる夫婦関係は、一つの硬直したホメオスタティックなシステムとして見事に記述されている。その中心にあるのは、妻による夫の過去の不貞行為に関する執拗な尋問と夫の弁明、謝罪、あるいは沈黙という一連の相互作用である。

「ひとつだけギモンがあるの。きいてもいいかしら」妻は遠慮がちに言うが、そのときすでに彼女のすがたは鴉の黒いつばさを装っている。私は反射的にそばを逃げたくなる。しかし逃げることはできず、じっと待っている。「あなた……に行ったことがあるの?」「……………」「だれと行ったの」「……………」「だれと行ったのよ」「……………」「かくさなくてもいいじゃない。ちゃんとわかっているんだから」「わかっているんならいいじゃないですか」「いいえ、あなたの口からはっきりききたいの。あたしには、なんにも包みかくしはしないって誓ったでしょ。お言いなさいよ。あった通り、すっかりそのまま言ってちょうだい。そこだけでなしに、あなたはいったいなん回旅行したの。どこどこに行ったの。どこに泊まったの。なにを食べて、どんな本をよんだの。映画をみたでしょ。なんの映画?どこで、なん回、どんなふうに、うれしかった、どうだったの?」私はそれに答えていく。努力して正確に、包み隠さず。しかしすべての過去を、ではなく、そんなことは不可能なことだと自分に言いわけしながら、でもそっと通りすぎてみて、妻の反応がないと大胆に隠そうとし、あいまいなことをあいまいに言うと、妻はそれを責め、少しちがうのだがはっきり罪のなかに書きこみなどして、自分のからだはふるえはじめる。そのからだは検証のためにすべてを妻にあずけてあるが、妻のからだは精密な虚偽発見器とことならない。私のおびえきった反応が、あらわれたところの正確さで妻のからだに記録され、ちがうんだと叫んでも妻はそれを許容しない。記録が私のあいまいな真実とくい違って痕跡を残すと、それは次から次に、別のくいちがいを呼び寄せずにはおかない。「うそつき」と妻は審き、私はあせって、不在証明を呈出する度に、うその深さが深くなる。もうどうしてものがれることはできない。とうとう、「インキ壺が投げつけられてからこちらのこ

とにしてください。そのときからのぼくを見てください」と絶叫してしまう。

(島尾, 1982, pp. 23-24)

この引用に見られるように、二人の対話は、予測可能で反復的なパターンを形成している。妻が告発者の役割をとり、夫が被告人の役割をとるこのパターンは、関係を崩壊させることなく、むしろ病理的な形で安定させている。「あなたが沈黙するから私は責める(妻)」と「あなたが責めるから私は沈黙する(夫)」という原因と結果の循環は、ジャクソンの言う「夫婦間の暗黙の取引 (marital quid pro quo)」(Jackson, 1965b) の一種として機能しており、このシステムのホメオスタシスを維持する暗黙のルールは、次のように要約できる。

妻は夫の罪を問い続ける権利を持ち、夫はそれを受け入れ続ける義務を負う。

この不文律こそが、二人の関係を袋小路に追い込み、同時に崩壊から守っている。ワツラウィックの「デジタルとアナログの不一致」(Watzlawick, 1983) という概念は、それを二人の単なる性格の不一致ではなく、モード(様式)の階層的矛盾として描き出す。

コミュニケーション論の第一の公理「コミュニケーションしないことは不可能である」に基づけば、夫が選択する沈黙は、情報の欠如ではなく、それ自体が強烈なメッセージである。夫はデジタル(言語)レベルでは沈黙しているが、アナログ(非言語)レベルでは「私にはいない」「あなたの追及には応じない」という強力な拒絶と回避のメッセージを発信し続けている。このアナログ的メッセージこそが、妻を最も苛立たせる要因となる。

妻が投げかける執拗な言辞(デジタル)は、夫のアナログな沈黙の中に潜む裏切りを、白日の下に晒し、確定させようとする試みである。妻は関係レベル(今、二人の間にある断絶)というアナログな問題を、事実の確認(過去の不貞の細部)というデジタルな次元で解決しようとする。しかし、デジタルな問いに対してアナログな逃避で応じる夫の態度は、妻にとって解読不能なパラドックスとなり、アナログな苦悩の過剰なデジタル化、すなわち妻のデジタルな追及をより過激な表現へとエスカレートさせる。

ワツラウィックによれば、デジタルなコミュニケーションは「内容」を伝え、アナログなそれは「関係」を規定する。妻は「何が起きたか(内容レベル)」を言語で詰めようとし、夫は「今はもう終わったことにしてくれ(関係レベル)」を態度で示そうとする。この階層のズレこそが、二人のコミュニケーションを噛み合わないまま高速回転する歯車に変えている。妻の狂気は、この階層的矛盾に閉じ込められた人間が、もはや通常の言語(デジタル)では対処できなくなり、自らの存在そのものを「発作」という究極のアナログ的メッセージに転換せざるを得なくなった末の姿として捉え直すことができる。それは、感情的ゆえの暴走というより、シ

システム上の矛盾に対する必死の（しかし不毛な）適応である。

2.2 対称的スキズモジェネシスと句読点の葛藤

妻の告発と夫の反撃という相互作用は、対称的スキズモジェネシスの典型例である。一方が非難のレベルを上げると、もう一方も反撃のレベルを上げ、際限のない対立のエスカレーションが生じている。

やさしくやさしくとところに願いながら、むかむか突きあがるものがあって、私は不本意なむごいことばが口を突いて出てくるのを止められない。

「さあ、さっきはじゃまがはいって中途半ばになったけど、あらためてやりなおしてもいいんだぜ」などと言ってしまふ。「よく考えてごらんよ。おまえ、なんのために、いつまでもグドゥマをくりかえすんだい。苦しい苦しいって言うけどね、おまえ苦しむのが、結構たのしいんじゃないのかい。そうでもなければ、こんなにいつまでも、おんなじことをぐずぐず言っくりかえすはずがないだろ。ええおい、どうなんだい。おまえがおれを責めはじめてからもう五箇月にもなるんだぜ」

今朝がたからどうしてか、むしように突っかかりたいきもちが、自分ながらおそろしい。ちょっとした妻のことばをつい引っかけて、それまでに似ない乱暴なことばや態度が湧きあがってくる。すると妻はおびえ、私が投げつけることばもだまってきくだけで、うずくまったまま泣きじゃくった。それはいかにもじめついて見え、私はいっそういらだち、畳の上にねじ伏せて何かを白状させたいきもちさえ起こる。白状しなければならぬのは私のほうで妻ではないのに、ぎりぎり拷問すれば妻の体内にはいりこんだ悪鬼らが逃げ出していくような気がしたのがへんだ。

（島尾，1982，p.277）

この夫の言葉は、このエスカレーションの背後にある句読点の葛藤を浮き彫りにする。妻は、夫の過去の裏切りを全ての相互作用の起点として句読点を打っている。妻の現実では、夫の罪が全ての苦しみの原因である。一方、夫は、妻の現在の「発作」や「グドゥマ（繰り言）」を問題の起点として句読点を打とうと試みる。この分節化の不一致が、両者の現実を乖離させ、互いを理解不能な存在へと変え、対立を永続させている。

2.3 夫が置かれたダブル・バインド状況

妻が構築した現実の枠組みの中で、夫は典型的なダブル・バインド状況に置かれている。

「ほんとうにおねがいしますから、あなた、うそを言わないでください。あたしはあなたが、こんなになってもまだ、ごまかしたりうそを言ったりするのが、たまらないのよ。しんそこら安心ができないの。あたしには、なんにもかくさないでね。ほんとうにおねがい。どんなひどいことでも正直にありのままを言ってください。そのほうがごまかされるよりずっといいのよ。どんな小さなことでもあなたがあたしに何かかくしているかぎりはあたしのこんな状態はなおらない」

「もうなんにも隠していることなんか無いんだがな」

「ほんとうに、なんにもかくしていない？」

「にんげんの記憶などというものはそんなに確かなものじゃないんだ。それに無意識の行為だってあります。だからそんなふうに問いつめられると、どう返事をしているかわからない」

「無意識だとか、にんげんだとか、そんなむずかしいことをきいているのじゃないのに。あなた、あたしに何かかくしていることはないでしょうね」

「ない、と思うけど」

「そうですか。それでは、あたしのきらいなところを言ってください。おねがい。あなたはあいつがすきだったんです。(そう言ってしばらくじっと私を見た) それを考えると気がちがいます。だからあたしもあいつのようにあなたを夢中にさせたい。あたしのいやなところを、かくさずにおしえてちょうだい。そうしたらあたしはいっしょうけんめいそれをなおします」

そんなふうには押しつけるところがいやだ、と思わず口に出しそうになるのを私はこらえた。妻の筋道立った考えは、ひとたび発作が襲いかかるその前にはどんな力もないという経験からだけでなく、それを正確にかぞえあげようと試みても、おそらく成功はおぼつかず、すきもきらいも背中合わせだ。妻をはなれたのもそしてどいつつあるのも認めないわけにはいかないし、女に引きよせられたことも打ち消せないが、それとくらべて、妻にないものをかぞえあげても、そこに確かな手答えがあらわれるわけでもない。しかしそれを打ちあけて受け入れられるとも思えず、強く言い張れば、いっそういつわりの顔つきがあらわれてくる。結局のところ詰め腹を切らせられるきもちで私はいくつかの妻の欠点とそこがいやだという箇所を口にした。外出のときこどもを連れて駅の改札口まで送って行くこと、無理に牛乳を飲ませ、卵を食べさせること……などひとつずつ挙げて行くと、ずるく何かをすり抜けたのに、口に出しただけでさえ取りかえしのつかぬ断絶を、求めてこしらえた気分を引きずりこまれた。妻も次第に顔をこわばらせ、だまして本心をききたしたあとに決定的な宣言をくだそうとでもするかのように頬を緊迫させたが、その夜は何ごともなく、妻は自分のことばにつじつまを合わせ、心置きがないそぶりを装いつづけるこ

とに失敗せずにすんだ。

（島尾，1982，pp. 253-254）

- ・第一の命令：妻は夫に対し、「すべてを正直に話しなさい」と要求する。これは、関係を修復するための唯一の道であるかのように提示される。
- ・第二の命令：しかし、より高次の（メタ）レベルでは、「何を話しても、それはお前の新たな罪の証拠として利用される」というメッセージが同時に送られている。夫が何かを告白すれば、それは新たな非難の材料となり、何かを否定すれば、それは嘘や隠蔽の証拠と見なされる。
- ・第三の命令：夫がこの矛盾した状況についてメタ・コミュニケーションを行うこと、例えば「あなたの質問にはどう答えても僕は罰せられる」と指摘することは、妻の狂気を刺激するだけであり、事実上不可能である。夫がそうした試みをすれば、それは「反省していない証拠」や「言い逃れ」として即座に却下されるだろう。

このノーウィン状況の結果、夫は沈黙するか、混乱するか、あるいは妻の定義する現実を一時的に受け入れるしか選択肢がなくなる。この過程で、彼は自己の内的メッセージ（記憶や感情）を正確に識別する能力を歪めざるを得ない状況に追い込まれていく。この夫婦間で完全に泥沼化した相互作用パターンは、システム内の他の脆弱な要素、すなわち子どもたちに影響を及ぼすことを必然的に運命づけられている。

第3章 システムにおける子どもたちの役割と仮説の構築

本章では、前章で分析した夫婦間の閉塞した相互作用システムが、システム全体にどのように影響を及ぼし、特に子どもたちの役割をいかに規定していくかを考察する。そして、この考察に基づき、本稿の中心仮説である「マヤが『患者と見なされる人（Identified Patient）』としての役割を担うであろう」という結論を構築する。

3.1 三角関係化とシステムの安定化要求

二者関係（ダイアド）が不安定になり、緊張が高まると、そのシステムは第三者を引き込むことで安定化を図ろうとする傾向がある。これは家族システム論において「三角関係化（triangulation）」（Haley, 1967）と呼ばれるプロセスである。『死の棘』に描かれる夫婦関係の緊張が極限に達したとき、その暴力的なエネルギーは、システム内の他のメンバー、すなわち子どもたちへと波及する。子どもたちは、夫婦間の葛藤の緩衝材として、あるいは注意の転換点とし

て、システムの崩壊を防ぐための役割を無意識的に担わされることになる。小説中、激化する両親の口論に対し、伸一が「カテイノジジョウはやめろ！」と叫ぶ場面は、このことの直接的な現れである。彼は、崩壊寸前の二者関係に引き込まれ、システムの安定化を試みる第三者としての役割を担わされている。

「あなたは、あいつと池袋に行ったことがあるか」

とまず最初の尋問がはじまると、次々に疑問が湧いてきて、終末の見当のつかないゲームが続く。

食事はそのままになり、伸一は、

「カテイノジジョウ、カテイノジジョウ」

とマヤに目くばせして白い目をつくり、親たちに、「カテイノジジョウはやめろ！」

とことばを投げつけるが、もうとどめようがない。湧きあがってくるききたいだけの尋問を妻は口にし、その釈明を求め、とどのつまり、

「あなたのきもちがどういうものかよくわかりました。あたしはあなたへの愛を失ったとしか思えないから、どうか死なせてほしい」

と言う。

「死なせろ、死なせろとおどかしてばかりいる」

とつい口をすべらせると、

「おどかしだとおっしゃるの？」

と目の色を変えて立ち上がる。すると伸一が母の腰に抱きついて、

「しんぱい、しんぱーい、ほくつかまえてはなさないんだ」

と叫ぶ。抑制ができなくなった私が、

「おまえが死ぬ前に、おれが死ぬ」

などとわめき、玄関のほうに出ようとする。今度は妻と伸一が私をつかまえて放さない。もみ合ううちに、妻の表情がやわらかにほぐれてきて、せつなそうな顔をしはじめるので、もうそれで終わりにしたいと思っていることがわかるが、自分のほうのところが、ざわめいていてすぐ応じられない。

「おねがいだから、うちをとび出そうとしないでください。それがこわいから、いやなことを考えてしまう」

などと、なんだか立ち場が逆になってしまう。でも仏頂面を消せないでいると、妻は大きなあくびをするのだ。

「ワイワイワイ、ワイワイワイ」

伸一とマヤが狂気のようによここんでとびまわり、

「おかあさんがアクビをした。終わった終わったもう終わった！カティノジジョウが終わったんだ」

と言う。私は思わず笑って妻のほうを見ると、同じように笑いかえす顔があって、ふたりはしっかり抱き合い背中を撫でている。

「よかった、よかった」

と言う口の下で、涙がふきあがってくる。妻はすぐそれを認めて、

「おとうさん、泣くな、泣くな」

と自分も涙をためる。そしてすっかりおくらしてしまった夕食を食べることになるのだ。次の発作がいつ襲ってくるかわからないので、そのときの安らぎは渴きのときの一滴の水のように甘美に感じられる。

「おとうさんが逃げようとするとき、ぼくとおかあさんが強いし、おかあさんが逃げようとするとき、ぼくとおとうさんが強い」

と伸一が言い、妻も私もまた笑ってしまう。もみ合ったあとでは、からだの疲れが出て、妻はすぐ寝つき、その寝息をきくと安らぎがいっそう広がり、私も眠りに落ちるようだ。

「いいミホになるから夕べはごめんなさい」

と明るい表情を保ったまま次の朝の目ざめどきに妻が言うと、私の目はこらえ性がなく、すぐ涙がにじんでくる。

「ごめんするよ」

といつのまにか目をさました伸一のほうが返事をし、

「きのうはけんかじゃない。おはなしだったねえ、おかあさん。カティノジジョウしたのでしょう？」

と言う。

（鳥尾，1982，pp. 82-85）

3.2 伸一の役割：無力なメタ・コミュニケーター

このシステムの中で、伸一は興味深い役割を演じている。前述の「カティノジジョウはやめろ！」という彼の言葉は、単なる子どもの嘆願ではない。これは、夫婦間の「終末の見当のつかないゲーム」のルールそのものに言及しようとするメタ・コミュニケーションの試みであると解釈できる。彼は、個別の非難や弁明の内容（コンテンツレベル）ではなく、その相互作用のパターン自体（リレーションシップレベル）を問題にしている。

しかし、ダブル・バインドが示すように、病理的なコミュニケーション・システムは、このようなメタ・レベルのコメントを許容しない。システムは、そのルール自体が問われることを最も恐れるからである。伸一の試みは両親によって無視され、無効化される。彼はこのゲーム

のプレイヤーとしてよりも、無力な審判としてシステムの外側に置かれがちである。このことが、彼がシステムの中心的な病理を引き受ける IP の役割から、結果的に除外される一因となっている。

3.3 仮説の構築：マヤの「患者と見なされる人 (Identified Patient)」への軌跡

ここにおいて、本稿の中心仮説を構築する。夫婦間の膠着状態を維持し、システムの崩壊を防ぐために、システムが IP を必要とするとき、その役割の担い手として選択される蓋然性が最も高いのは、マヤである。その理由は以下の通りである。

- ・伸一：システムからの遠心性（外部への逃避）兄である伸一は、メタ・コミュニケーションを試みることで、システムの病理的ルールから距離を置こうとする傾向があるため、IP の候補から外れやすい。
- ・マヤ：システムへの求心性（庇護による繋ぎ止め）妹のマヤは伸一よりも年少であり、システム内でより受動的で脆弱な立場に置かれている。マヤは両親の葛藤を直接的に吸収しやすいポジションにいる。

3.3.1 母ミホとのアナログの共鳴と逃げ場の有無

第一の理由は、マヤが母の精神状態に対して極めて高いアナログ的感応力を持っていたことにある。伸一が、状況を言葉（デジタル）で把握し、学校や読書といった外部の世界あるいは論理というメタ・レベルへ逃避する術を持っていたのに対し、幼いマヤは家庭という閉ざされたシステム、特に母の情動と身体的に直結している。

テキスト内では、母が狂乱に陥る直前の微細な空気の変化を、マヤが真っ先に身体の硬直やおびえとして察知する描写が繰り返される。バイトソンの用語を借りれば、マヤは母の非言語的な苦悩を自らの身体で増幅し、独自の質へと変換して響かせる「共鳴板 (sounding board)」の役割を担われている。この高い感応性が、システムの危機を症状というアナログ的言語で表現する出口としてマヤを機能させ、結果としてマヤを IP の座へと固定するだろう。

なぜか、なにげなく目を向けた垣根の外に配達人の制服や帽子を見てしまい、私に見られた配達人が門に近寄ってきたかと思うと、郵便受けに、ことん、と音がする。いつもその音をマヤがききのがさないのもふしぎだ。そしてかならず「オテマギ」とひとりごとを言うのだ。私はひょいと腰を浮かしそうになるのをおさえつけて待っている。妻がそこにおりて行く。かたかたと音をさせて、配達されたものを取り出し、しばらくそこでじっとしているのがわかる。妻が部屋に아가ってくる。明るそうな軽い足どりのようだ。なんでもなかったのだ。仕事部屋のほうにきた。「あなた、はい、おてがみ」そう言って敷居ぎわのところに置いて行くだらう。しかし私がきいたのは、「あなた、きたわよ」と

いう妻のたかぶりをむりにおさえた声だ。私はいきなり汗をびっしょりかく。「いっしょに読む約束よ」そう言って妻が封を切る。最初読んでだまって私によこす。見なれた字が目にはいる。火曜日に水道橋に行ったがあなたは来なかった。何か変わったことが起こったのですか。変わりがないようにとも思いまた変わったことがあってくれたらとも思う、と書いてある。火曜日は夜学の授業に出る日だ。それが私の前のすがたなのだ。妻の夢の、水道橋のことの奇妙な予告。だまってそれを妻にかえす。妻はそれを持って便所にはいった。

そのときこどもはふたりとも手紙を取り出してから便所にはいるまでの母親のようすをじっとだまって追っていた。便所にはいったとき、マヤはおびえるように顔をしかめて、「マヤ、ミタクナイ」とぼつんとひとりごとを言い、伸一は母親が出てくると、「べんじょに、おてまぎをすてたの?」ときいた。「紙よ」と妻が返事をする。「てまぎの紙?」ともう一度伸一はきく。「ただの紙」妻が逃げると、「うそつけ」

伸一ははき出すようにそう言った。でもそのときは妻にはなんの変化もなかった。妻さえ動揺しなければこれからの分もこうして処理できるかもわからない。それはひとまず安心だが、伸一の投げつけるように言ったことばは気にかかる。

（島尾，1982，pp. 33-34）

3.3.2 三角関係とホメオスタシス（恒常性維持）

第二に、三角関係化が挙げられる。これは夫婦間の解消不能な葛藤（二者関係）が生み出す緊張を緩和するために、第三者である子どもを巻き込み、システムの焦点を夫婦の対立から子どもの問題へと逸らすことで破局的な崩壊を防ごうとする。

夫は妻による執拗な裏切り者としての糾弾（デジタル）を回避するため、マヤへの献身を通じて良き父という新たな役割をアナログ的に提示し、自身の定義を「再構成／リフレーミング（reframing）」しようとする。一方、妻にとってもマヤの面倒は、夫を加害者の座から引きずり下ろし、共に世話する親という協力関係に繋ぎ止めるための、システム上の唯一のカードになる。マヤの取り扱い方次第で、夫婦は敵対者から同士（ケアの担い手）へと一時的に役割転換（ロール・シフト）する。伸一が一定の自律性を持ち、この病理的な三角関係への動員をデジタルな境界線によって拒絶し得たのに対し、発達段階的に脆弱なマヤは、両親を繋ぎ止めるための共通課題として差し出されるだろう。

私は道のまんなかになしゃがむと、マヤに背中を向け、

「さあ、おんぶ」

と言うと、マヤはすぐ私の背中からだをもたせかけてきた。

「マヤ、あれはねえ、どこにやったかわからなくなったんだろ。そんならそう言えばいいのに、どこにやったかわからなくなったって。そう言えばおとうさんちっもおこりはしない。ばかだねえ。もういい。もういい。びっくりしたろ。おとうさんもびっくりしたよ。マヤがどんどんあんなほうに歩いて行くんだもの。あっちに何かあったの？ひとりで行ったことがあるの？どうしておうちに帰ろうとしないで、あっちに行ったのかな。おとうさん、こわいかい？こわくないだろ。ちゃんと正直に言えば、なんだっておとうさんおこらないよ。あんまりニャンコがでたらめをいうから、どっかに行くなんて言っちゃったけど。ごめんなさいね。もうどこにも行かないし、あんなことも言わないようにする」

歩きながら、背中にいろいろはなしかけても、マヤはひとことも返事をしないでだまっていた。私は自分のすることがつい危険なほうにかたよって行くことに不安が湧き、自信が持てそうでない。ようやくあやういところでとどまるけれど、いつ制動がきかなくなるかわからない。どこかが食いちがい私は正常な情意のはたらきができなくなった。私のゆがんだ生活がこどもらに与えてしまった歪みを、どう見つけだしそして直して行けばよいかを考えると暗澹となった。マヤがうしろを振り向き振り向き、夢中になって逃げて行く前ごごみの小さなすがたは私の目の底から消えそうにない。

(島尾, 1982, pp. 346-347)

3.3.3 身体の言葉（アナログ）による介入の必然性

妻と夫の対立が極限に達した瞬間、マヤの身体が異常をきたす。理由の第三は、この言葉にならない叫びとしての症状が、両親の不毛なやり取りを物理的に中断させ、システムの崩壊を瀬戸際で食い止める力を持っていたことにある。

伸一が理解というデジタルな手段でシステムからの距離を確保したのに対し、マヤは発病という究極のアナログ的言語を用いてシステムの中核へ介入する。伸一はデジタルな境界線を引くことで、システムからの切り離しを試みたが、マヤはアナログな共鳴によってシステムとの境界線が消失してしまった。マヤの病気は、夫婦の激しい争いという「ファーストオーダーの変化（システム内の変動）」を、子どもの看病という別のファーストオーダーの活動にすり替えることで、システムが根本的に壊れるのを防いでいる。この発症こそが、一家心中や離婚といった破滅的な「セカンドオーダーの変化（システムの組み換え）」を回避し、病理的な形であれ現状を維持するためのホメオスタシス（恒常性維持）機能として、家族システムから必然的に要請された役割となるだろう（Watzlawick, Weakland, & Fisch, 1974）。

待ち合わせて（というより私はす早くからだを洗って先にあがり、番台のあたりを注意しつつ妻の出ってくるのを待っていたのだが）その帰りの道すがら妻から、「あいつと一緒におふろにはいったの？」と問いつめられて逆上してしまった。

「そんなことばかりいつまでぐずぐず言っているんだ。おまえは本気で生活のたてなおしを考えているのかい。いつまでもいつまでも、過ぎてしまったことをほじくりかえしてなんになるもんか。こんなにおまえの言うなりになっているのがわからないのか。おまえがその気なら、おれだって考えがある。おれのやったことがどうだってんだ。そんなに気に入らないんなら、殺すなりなんなりすればいいじゃないか」

ヒステリックに吐きつけて言うと、私は持っていたこうもり傘を、かたわらの小学校のコンクリート塀に叩きつけ、骨を折ってばらばらにし、みぞのなかに投げ捨てたのだ。しとしとと雨がふっていたが、着ていたアメリカ中古服の茶色の上着も脱ぎ、右手にぶらさげて、雨でどろどろになった道の上を引きずって歩いた。高ぶるきもちがとどめられなくなり、器物を無茶苦茶に破壊したくなってくるのだ。それでもよそのものに手をかける気分にはなれず、自分の身に着けたものの破損を計るより仕方がなかった。ついでにズボンを脱ぎ、上衣と一緒に道の上に叩きつけ、下着だけのおかしな恰好で、びしょ濡れになってさっさと先に立って帰ったのだった。妻はだまって上着とズボンを拾っていたのに。

まるで私の高ぶりを写し出すようにマヤの熱が高くなっているのであわてた私は傘もささずに医師を呼びに行かなければならない。熱は高いが肺炎を起こしてはいなかったと診断されたときのほっとしたこと。はしかを軽くするためだと言って医師は伸一の血を取り、マヤに打ちなおして帰って行った。そのあと銭湯の帰りでのさくぐれ立ったきもちの吹っ切れない私はふてくされて寝てしまったが、水を欲しがらるマヤに今度は妻がろくろく眠らずに看病をしていたようだ。

（島尾，1982，pp.512-513）

結 論

（1）仮説の最終的な定式化

本稿は、小説『死の棘』に描かれた家族を、コミュニケーション的アプローチから分析してきた。その分析全体を要約し、本稿の中心仮説をここに改めて定式化する。

小説『死の棘』に描かれた家族システムは、その硬直した病理的平衡を維持するため、内部の成員の一人を「患者と見なされる人（Identified Patient）」として症状を持たせることを要求する。その役割は、システムに対してメタ・レベルの言及を試みる伸一ではなく、

より受動的な立場にあるマヤに割り当てられる可能性が極めて高い。その結果、マヤは何かの症状を発現させ、その症状を通じて夫婦間の救いようのない相互作用を和らげ、システムの崩壊を防ぐという機能を担うことになるであろう。

ワツラウィックらが分析した『ヴァージニア・ウルフなんかこわくない』のジョージとマーサの夫婦にとって、架空の息子は二人の間の共有された虚構であった。この存在は、夫婦関係を維持するための不可欠なゲームの規則として機能するが、それはあくまで当事者間の合意に基づいた象徴的・デジタル的な構成物に過ぎない。したがって、劇の終盤で行われる息子の殺害とは、ルールの破棄という合意のみによって完結しうる、セカンドオーダーの変化（システムの組み換え）であった。夫婦が共有していた架空の息子の存在と、その死が夫婦関係のルールを劇的に変化させた。つまり、架空の息子の喪失という不在をシステムの維持装置にしている。

対して、『死の棘』におけるマヤの症状は、肉体を伴った子どもに刻印された不可抗力的・アナログ的な出来事である。架空の息子は親の意思で殺害（消去）できるが、マヤの症状は、親がどれほど「やめさせたい」と願っても、あるいは「なかったことにしたい」と合意しても、親の制御（コントロール）を越えて存続し続ける。この「親の意思に従わない」という症状の性質こそが、夫婦の勝手な合意によるゲームの終了を拒み、二人を看病する親という役割に永続的に縛り付ける。『死の棘』の家族システムにおいては、このシステム的要求の結果として、マヤが症状という形で生ける屍となること（社会的・心理的な死）によって、夫婦のどうすることもできない相互作用を鎮め、システムの病理的ホメオスタシスが維持されるというプロセスが予測される。すなわち、マヤの症状という存在がシステムの維持装置になるだろう。それは、家族が家族であり続けるために、マヤに要請された惨くも切実な役割である。

かくして、マヤという有症の娘は、ジョージとマーサの息子よりも遥かに強力で、かつ解体不可能なシステムの楔として機能する。架空の息子がシステムの潤滑油であったのに対し、マヤの症状は、システムの矛盾を肉体化し、外部への逃げ道を物理的に封鎖する生きた装置となる。この逃げ場のなさが、『死の棘』というシステムの密室性と、底知れぬ凄惨さを支える構造的要因となっていると言えよう。

このことは、関係のパターンの中に問題を捉えるという視座から導き出されたものである。

(2) 仮説の検証と今後の展望

本稿が小説『死の棘』に対するコミュニケーション的アプローチによって純粹に理論的・演繹的に導き出したこの仮説は、奇しくも、そして悲劇的にも、作者である島尾敏雄とその家族が辿ったその後の実際によって、極めて正確に検証されることとなった。

小説の舞台となった時期から数年後、一家が奄美大島へ移住してからのことである。マヤは、高い知性と明晰な意識を完全に保ったまま、身体に不随意運動が生じ、発話や発音、発語が困難になるという、原因不明の重篤な障害を発症した。マヤが正気を守りながら身体を制御できなくなり声を失ったという事実は、きわめて示唆的である。これは、マヤがデジタルの領域（理性や思考）では状況を完全に理解し判断しながらも、アナログの領域（非言語的反応）において、システムを維持するための攪乱と沈黙（運動と言葉の障害）という役割を完遂せざるを得なかったことを物語っている。

マヤの理解や判断の維持は、マヤが家族内で起きているダブルバインド（二重拘束）を、内容レベル（デジタル）において完全に正確にまともに受信していたことを意味する。通常、子どもは親の矛盾したメッセージに対し、混乱したり拒絶したりすることでまた狂気により自己を防衛するが、マヤはその正気ゆえに、逃げ場のない論理的矛盾をすべて正解として受け取ってしまった。この「把握しているが、言葉にできない（あるいは言葉にすることが禁じられている）」という状態こそが、マヤの精神を内側に閉じ込め、身体のみを外部へ差し出させるという過酷な分断を生んだ。

症状の不随意性は、語用論的・システム論的に見て極めて重要な意味を持つ。もしマヤが随意（自分の意志）で動いたり黙したりすれば、それは両親に対する反抗や拒絶というデジタルなメッセージになり、家族をはじめとする周囲からの反撃や修正を招く。しかし、それが不随意な症状である限り、それは誰の責任でもない自然現象としてシステムに君臨する。親も、その症状を叱ることはできず、ただケアという名の下に結びつけられることになる。マヤの症状は、自身の意志を消去（不随意化）することで、家族を繋ぎ止める絶対に拒絶されないメッセージとなり果てた。

マヤの症状は、まさに本稿の分析が予測した通りの形で、家族システムの歪みを一身に引き受ける役割として機能した。残された知性や意識と失われた身体の制御の残酷なコントラストこそが、島尾という家族システムの、最も純粹で破壊的なホメオスタシスの発露であった。この事実は、文学作品が実際に反映するだけでなく、その中に含まれる人間関係を理論的に分析することによって、未来に起こりうる事象を予測しうる一例である。本稿が示した分析は、人間の苦悩を個人の内面に閉じた問題としてのみ捉えるのではなく、その人が生きる関係の中で理解することの重要性を示す。それは、相互作用のパターンが、理論によってコード化されたとき、悲劇的で予測的な文法を持つという、コミュニケーションの本質についての主張に他ならない。

注

- 1) 鳥尾敏雄の小説『死の棘』は、フィクションとノンフィクション、いずれの領域に属する作品か。物語が、作者である鳥尾敏雄と妻ミホとの間に実際に起こった、夫の不貞とそれに続く妻の狂気という壮絶な夫婦関係を克明に描いているという事実は、広く知られている。だが、この作品を単なる私生活の記録文学、すなわちノンフィクションとして片付けてしまうことは、その文学的本質を見誤ることに他ならない。本稿は、『死の棘』の物語が事実の記録という強固な骨格を持ちながらも、作者の明確な創作意図によって構築されたフィクションの肉付けがなされており、その両義性、境界線の曖昧さの中に存在するという立場から論を進めたい。

まず、『死の棘』がいかに強固な事実に根差しているか。この物語の核心をなす夫の不貞、妻による夫の日記の発見、そしてそれに続く妻の狂気という一連の出来事が、鳥尾夫妻の身に実際に起こった体験であることは疑いようがない。その客観性を担保するのが、鳥尾敏雄自身が事件の渦中で記録し続けた膨大な日記、すなわち後に『「死の棘」日記』として公開された記録の存在である。梯（2016）が指摘するように、『「死の棘」で起きる出来事のほぼすべてが事実であることは、鳥尾の日記によって裏付けられている。小説の中で描かれる、常軌を逸した夫婦間の対話、猜疑心に苛まれる妻の詰問、そしてそれに追い詰められていく夫の姿といった数々のエピソードは、客観的な記録によってその事実性を検証可能である。この一点において、『死の棘』は、他の多くの私小説とは一線を画す、強靱なノンフィクションとしての性格を備えている。

しかしながら、この作品を単なる事実の記録と見なすことはできない。なぜなら、作者・鳥尾敏雄は受動的な記録者ではなく、この未曾有の体験を文学作品へと昇華させようとする、極めて能動的な「作家」であったからである。真鍋呉夫は、鳥尾の不倫という行為そのものについて「小説を書くためだったかもしれない」と推察しているが、この指摘は、彼の作家としての本質を鋭く突いている（梯、2016）。事実、鳥尾は事件が発覚した直後から、すでに「審判の日の記録」と題した草稿に着手している。この「審判の日」という聖書的な表題の選択が、鳥尾が当時まだキリスト教徒ではなかったという事実と重ね合わされるとき、その意味は一層重みを増す。それは、彼が現実の破局を、それが生じたまさにその瞬間から、一つの文学的素材として捉え、物語として構成しようとしていたことの動かぬ証拠であり、生の現実を物語の枠組みへと貪欲に取り込もうとする、凄まじい作家意識の発露に他ならない。

さらに、鳥尾が一個の小説家として、現実の出来事をいかに取捨選択し、文学的に再構築したかという点に目を向けるとき、そのフィクションとしての側面はより一層鮮明になる。特に象徴的なのが、物語の鍵を握る不倫相手、すなわち「あいつ」の人物造形である。小説における「あいつ」の人物像は一貫せず、その姿は断片的で捉えどころがない。この理由について鳥尾自身が、妻ミホへの配慮から「できるだけ切り捨てようと思」ったと語っているように、これは事実をありのままに写し取った結果ではなく、作品全体の効果と妻への影響を計算した上での、意図的な編集行為であった。ここに現れているのは、記録者の客観性ではなく、物語の構築者たるフィクション作家としての明確な選択である。この作者としての取捨選択は、物語の脇役のみならず、主人公である「私」そのものにも及んでいる。梯（2016）が「主人公の『私（トシオ）』が、その心理においても鳥尾とイコールであるということはいかなる点でもできない」と指摘している点は重要である。たとえ描かれる出来事が事実であったとしても、登場人物の内的世界、その心理描写は、作者によって創造されたフィクションの領域に属する。主人公トシオの苦悩や葛藤は、鳥尾本人のそれと重なりつつも、あくまで文学的表現として濾過され、再構成されたものに他ならない。

このように『死の棘』は、日記というノンフィクションの骨格を持ちながらも、作者の創作意

図、物語的構築、そして人物造形における選択というフィクションの肉付けが分ち難く癒着している。本稿は、それゆえに、この作品をフィクションかノンフィクションかという二元論で単純に分類することはしない。日記という事実は、作品に反駁不能の真正性の礎を与え、一方で創作という営為は、その個人的地獄の心理的恐怖に普遍的な構造を与え、読者が追体験可能な物語へと昇華させた。この作品は、まさしく事実（ノンフィクション）と創作（フィクション）が極限の緊張関係において融合し、文学という形式でしか到達し得ない、凄絶な私の世界を現出させている。

- 2) エドワード・オールビーの戯曲『ヴァージニア・ウルフなんかこわくない』（Albee, 1962 鳴海訳 1969）は、コミュニケーション論、特に夫婦間の相互作用パターンの病理を分析するための優れた事例を提供した。話の舞台は小さな大学町であり、登場人物は歴史学の教員ジョージ、その妻であり学長の娘でもあるマーサ、そして彼らの家に深夜招かれた若い夫婦ニックとハネーの四人である。物語は、この四人がアルコールに煽られながら繰り広げる一夜の激しい心理的ゲームとして展開される。劇の進行は、登場人物間の絶え間ない相互作用、すなわち「ゲーム」によって定義され、その過程で彼らの関係が規定されていく。この相互作用の力学は特に、ジョージとマーサの夫婦関係において顕著であり、彼らの関係は対称的なエスカレーションによって特徴づけられる。彼らの会話における挑発や非難の応酬は、単なる口論ではなく、関係の主導権をめぐる闘争に他ならない。このパターンにおいては、一方の敵対的な行動が相手のそれを引き起こす刺激となり、互いが相手の攻撃性に応酬することで、どちらも面子を失うことなしには引き下がれないまま、対立は自己増殖的に激化していく。この夫婦のゲームを律する暗黙のルールの中でも、彼らの関係の安定と病理を同時に支える核心的機能を果たしていたのが、想像上の存在である息子をめぐる共有された幻想であった。この息子は、夫婦間で共有された一種の「家族神話」として機能しており、そのゲームには「部外者には息子の話をしてはならない」という極めて重要なルールが存在した。このゲームの転換点となったのは、マーサがこのルールを破り、ハネーに息子の話をしてしまったことであった。ルール違反に対するジョージの報復は、単なる仕返しではなく、彼らの最も中心的なゲームそのものの土台を破壊するメタ・レベルの行動として実行される。彼は、マーサが破ったルールを利用して彼らの息子が「死んだ」と告知する。この行動が持つ決定的な意味は、それが彼らのゲームを終わらせるための究極的な一手であったという点にある。一方的に共有幻想を終わらせることで、ジョージは彼らの関係のルールそのものを根底から変え、ゲームに基づいた相互作用を不確かな新しい現実へと移行させた。マーサは当初、それを信じようとせず、抵抗するが、ジョージは冷徹に応じ、マーサが先にルールを破ったことを指摘する。最終的にマーサは、絶望に陥り、夜明けとともに彼らの長年にわたるゲームは終焉を迎える。この息子という幻想は、対称的なエスカレーションの暴走を防ぐ安全弁であると同時に、関係の成長を妨げる病理そのものであった。ジョージによるその破壊は、ゲームの終焉であると同時に、彼らが初めて幻想なしの関係と向き合う可能性の始まりをも示唆している。

ジョージ（うんざりして）ルールを知らないのか、マーサ！ 忘れたのかい、ルールを！

マーサ ああ！

ニック（事情がわかりかけてきて、当惑する）なんの話です、いったい？

ジョージ おれにはあの子を殺す権利がある。

マーサ わたしたち二人の子どもだわ！

ジョージ そうさ、おまえが産んだよ、たいしたお産だった……

マーサ 二人の子どもよ！

ジョージ それをおれが殺してやった！

マーサ だめ！

ジョージ 殺してやった！

長い間。

ニック （非常にしずかに） どうやらわかってきた。

ジョージ （同じく） そうか？

ニック （同じく） わかってきたぞ、このいきさつが。

ジョージ （同じく） お利口さん。

ニック （荒々しく） チクショウ、そういうわけか！

マーサ （悲嘆と喪失の極） 権利だって……権利があつてたまるもんか……

ジョージ （やさしく） おれには権利がある。話に出なかつただけさ。殺したければ、いつでも殺せるんだ。

マーサ でもなぜ？なぜ殺すの？

ジョージ きみがルールを破ったからだ。あの子のことを口走ったから……よその人にしゃべっちゃったから。

マーサ （涙ぐみ） わたしが？まさか。

ジョージ しゃべったよ。

マーサ だれに？！

ハネー （泣きながら） あたしに。あたしにお話になったわ。

マーサ （泣きながら） うっかりしたわ！ときどき……夜おそくなると、ときどき……みんなの話がはずんでと……つい……ついしゃべりたくなるのよ、あの子のこと……わたしはこらえてきた……菌を食いしばって……一生けんめいがんばった……でもね、ジョージ、追いつめたのはあんたよ……こうまでしなくてもよかったのに……しゃべったわ……たしかに……でも崖っぶちから突き落さなくなつて……なにも……殺さなくなつて。

(Albee, 1962 鳴海訳 1969, pp. 198-200)

引用・参考文献

Albee, E. (1962). *Who's afraid of Virginia Woolf?* Atheneum Books.

(オールビー, E. 鳴海四郎 (訳). (1969). ヴァージニア・ウルフなんかこわくない; デリケート・バランス (Issue 1). 早川書房)

Bateson, G. (1935). 199. Culture Contact and Schismogenesis. *Man*, 35, 178-183.

Bateson, G. (1936). *Naven: A Survey of the Problems Suggested by a Composite Picture of the Culture of a New Guinea Tribe Drawn from Three Points of View*. Cambridge University Press.

Bateson, G. (1960a). The Group Dynamics of Schizophrenia. In L. Cumming, M. S. Appleby, & J. John (Eds.), *Chronic Schizophrenia: Explorations in Theory and Treatment* (pp. 90-105). Glencoe, IL: Free Press. In *Steps to an Ecology of Mind: Collected Essays in Anthropology, Psychiatry, Evolution, and Epistemology* (pp. 320-339). University of Chicago Press.

Bateson, G. (1960b). Minimal Requirements for a Theory of Schizophrenia. *Archives of General*

- Psychiatry, 2, 477-491. In *Steps to an Ecology of Mind: Collected Essays in Anthropology, Psychiatry, Evolution, and Epistemology* (pp. 244-270). University of Chicago Press.
- Bateson, G. (1972). *Steps to an Ecology of Mind: Collected Essays in Anthropology, Psychiatry, Evolution, and Epistemology*. University of Chicago Press.
- Bateson, G. (1979). *Mind and Nature: A Necessary Unity*. Hampton Press.
- Bateson, G., & Bateson, M. C. (1987). *Angels Fear: Towards an Epistemology of the Sacred*. Macmillan Publishing Company.
- Bateson, G., & Donaldson, R. E. (1991). *A Sacred Unity: Further Steps to an Ecology of Mind* (1st ed). Cornelia & Michael Bessie Book.
- Bateson, G., Jackson, D. D., Haley, J., & Weakland, J. H. (1956). Toward a Theory of Schizophrenia. In G. Bateson (Ed.), *Steps to an Ecology of Mind: Collected Essays in Anthropology, Psychiatry, Evolution, and Epistemology* (pp. 201-227). University of Chicago Press.
- Bavelas, J. B. (1967). Chapter 5. A Communicational Approach to the Play WHO'S AFRAID OF VIRGINIA WOOLF? In P. Watzlawick, J. B. Bavelas, & D. D. Jackson (Eds.), *Pragmatics of Human Communication: A study of Interactional Patterns, Pathologies, and Paradoxes* (pp. 149-186). W. W. Norton & Company.
- Haley, J. (1967). Toward a Theory of Pathological Systems. In P. Watzlawick, J. H. Weakland, & Mental Research Institute (Eds.), *The Interactional View: studies at the Mental Research Institute, Palo Alto, 1965-1974* (pp. 31-49). W. W. Norton & Company. Reprinted by permission of the author, the editor and the publisher from *Family Therapy and Disturbed Families*, G. Zuk & I. Boszormenyi-Nagy (Eds.), 11-27 (1967). Palo Alto, Science and Behavior Books.
- 花田里欧子. (2018). 島尾マヤの声なき語りに関する予備的検討 —— 病歴と症状について ——. *I. R. S. : ジャック・ラカン研究*, 17, 101-127.
- Jackson, D. (1957). The Question of Family Homeostasis. In W. Ray (Ed.), *Essays at the Dawn of an Era — Don D. Jackson, MD, selected papers volume I.* (pp. 99-110). Phoenix: Zeig, Tucker, Theisan, Ltd. Reprinted with permission from *The Psychiatric Quarterly Supplement*, 31 (part 1), 79-90 (1957). First presented as the Frieda Fromm-Reichmann Lecture at the Palo Alto V. A. Hospital in Menlo Park, January 1954; also presented May 7, 1954 at the APA Meeting, St. Louis, Mo.
- Jackson, D. (1965a). The Study of the Family. In W. Ray (Ed.), *Essays at the Dawn of an Era — Don D. Jackson, MD, selected papers volume I.* (pp. 201-220). Phoenix: Zeig, Tucker, Theisan, Ltd. Reprinted with permission from *Family Process*, March, 4(1), 1-20 (1965).
- Jackson, D. (1965b). Family Rules: Marital Quid Pro Quo. In W. Ray (Ed.), *Essays at the Dawn of an Era — Don D. Jackson, MD, selected papers volume I.* (pp. 221-231). Phoenix: Zeig, Tucker, Theisan, Ltd. Reprinted with permission from the *Archives of General Psychiatry*, June, 12, 589-594 (1965).
- 梯久美子. (2016). 狂うひと : 「死の棘」の妻・島尾ミホ. 新潮社.
- Perceval, J. fl., & Bateson, G. (1961). *Perceval's Narrative: a Patient's Account of His Psychosis, 1830-1832*. Stanford University Press.
- Ray, W. (Ed.). (2005). *Essays at the Dawn of an Era — Don D. Jackson, MD, Selected Papers Volume I.* Phoenix: Zeig, Tucker, Theisan, Ltd.

- Ray, W. (Ed.). (2009). *Interactional Theory in the Practice of Therapy — Don D. Jackson, MD, Selected Papers Volume II*. Phoenix: Zeig, Tucker, Theisan, Ltd.
- Ruesch, J., & Bateson, G. (1951). *Communication The Social Matrix of Psychiatry*. W. W. Norton & Company.
- 島尾敏雄. (1982). 島尾敏雄全集：第8巻. 晶文社.
- Watzlawick, P. (1964). *An Anthology of Human Communication*. Science and Behavior Books.
- Watzlawick, P. (1976). *How Real Is Real?: Confusion, Disinformation, Communication*. Random House.
- Watzlawick, P. (1978). *The Language of Change: Elements of Therapeutic Communication*. Basic Books.
- Watzlawick, P. (1983). *The Situation is Hopeless, But Not Serious: (The Pursuit of Unhappiness)*. W. W. Norton & Company.
- Watzlawick, P. (1984). *The Invented Reality: How Do We Know What We Believe We Know?: Contributions to Constructivism*. W. W. Norton & Company.
- Watzlawick, P. (1988). *Ultra-Solutions, or, How to Fail Most Successfully*. W. W. Norton & Company.
- Watzlawick, P. (1990). *Münchhausen's Pigtail, or, Psychotherapy & "Reality": Essays and Lectures*. W. W. Norton & Company.
- Watzlawick, P., Bavelas, J. B., & Jackson, D. D. (1967). *Pragmatics of Human Communication: A Study of Interactional Patterns, Pathologies, and Paradoxes*. W. W. Norton & Company.
- Watzlawick, P., Weakland, J. H., & Fisch, R. (1974). *Change: Principles of Problem Formation and Problem Resolution*. W. W. Norton & Company.
- Watzlawick, P., Weakland, J. H., & Mental Research Institute. (1977). *The Interactional View: Studies at the Mental Research Institute, Palo Alto, 1965-1974*. W. W. Norton & Company.

要 旨

本稿は、島尾敏雄の小説『死の棘』に描かれる極限的な人間関係を語用論的・システム論的アプローチを用いて分析した。登場人物の行動を個人の病理としてではなく、家族という一つの相互作用システム内で維持されるコミュニケーションのパターンとして捉え直すことを目的としている。

まず、理論的枠組みとして、家族をホメオスタシス（恒常性）システムと定義し、その安定性が不可視のルールによって統治されているとする。小説内の夫婦関係は、妻の執拗な尋問と夫の沈黙・弁明という円環的な相互作用（相補および対称的スキズモジェネシス）によって、病理的な平衡状態を保っている。この硬直したシステムにおいて、夫は「何をしても罰せられる」というダブル・バインド（二重拘束）状況に置かれ、夫婦間の対立は終わりのないゲームと化している。

こうした二者関係の緊張が限界に達すると、システムは崩壊を防ぐために第三者を巻き込む三角関係化を引き起こす。本稿の中心的な仮説は、この過程において、長男・伸一ではなく、長女・マヤがシステムのために患者と見なされる人（Identified Patient: IP）の役割を担うことになる、というものである。伸一は「カテイノジジョウはやめろ!」と叫ぶなど、システムのルール自体に言及するメタ・コミュニケーションを試み、心理的に外部へ逃避する術を持っていた。対して、より幼く母親との身体的・アナログ的な共鳴が強いマヤは、両親の葛藤を一身に吸収し、逃げ場のない状況に置かれる。

本稿は、マヤが何らかの症状を発症することで、夫婦が敵対者から看病する親へと役割を変え、システムの決定的な崩壊（離婚や心中）が回避されると論じる。エドワード・オールビーの『ヴァージニア・ウルフなんかこわくない』における架空の息子とは異なり、マヤの症状は実体を伴う不可逆的なものであり、システムを永続的に固定する楔となる。

この理論的仮説は、後に島尾敏雄とその家族が奄美大島へ移住した際、マヤが現実に重篤な不随意運動と声の障害を発症したという事実によって悲劇的に裏付けられた。正気を保ちながら身体の制御を奪われたマヤの病態は、家族システムの歪みを不随意という形で引き受け、沈黙によってシステムを維持しようとした結果であると結論する。

キーワード：コミュニケーション的アプローチ、ダブル・バインド、家族システム論、ホメオスタシス、患者と見なされる人